

# 広島県における今後の高等学校教育の 在り方を検討する協議会会議録

平成24年5月31日（木）

広島県教育委員会

広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会出席者名簿

平成24年5月31日（木）  
午後2時から午後4時まで

1 出席委員（50音順）

伊藤敬之  
加藤千政  
川野祐二  
吉川信政  
古賀一博  
小村和年  
牛来千鶴  
坂越正樹  
佐々木寛  
武田哲司  
寺西玉実  
富永健三  
長田克司  
西井裕昭  
二見吉康  
前眞一郎  
三好久美子  
山口寛昭

2 欠席委員（50音順）

青木暢之  
赤岡功  
砂原文男  
中川和義  
毛利葉

馬屋原課長代理：失礼いたします。皆さん、こんにちは。ただいまから広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会（第2回）を開催いたします。

それでは、坂越会長、よろしく願いをいたします。

坂越会長：はい。前回の会で会長ということで御選任いただきました坂越でございます。今日もどうぞよろしく願いいたします。

出席御予定の委員の皆さんはおそろいということのようですので、早速会議次第に即しまして進めて参りたいと思います。

本日、用意している協議議題は2つでございます。

まず一つ目は、前回の協議会の意見を踏まえた上で意見交換を行なっていただくと。

前回、人材、本県を支える人材について、あるいは求めるべき力についてということ意見交換をお願いしました。いわば、目標像ですよね。理想とする若者像。

そして、協議議題の二つ目は、そういう理想像をどういう教育によって、高等学校教育によって達成していくのかという、こういう大きな2つ、目的と手段というような形で考えていけたらなというふうに思っております。

まず最初に、前回1回目の協議会で、御都合によって御出席いただけなかった委員のお二人のほうから、まずは、事務局から御紹介いただいた後、前回出席の皆さんから3分程度という非常に短い時間だったんですけれども、今の若者をどう見ておられるのか、それから、これから求められる人材というのはどういうイメージなのかということについて自由に意見をいただきました。それについて、今日御出席の委員の方からいただきたいと思っております。その後、意見交換を20分から30分程度とる予定でおります。

では、事務局のほうから、まず委員の御紹介をお願いします。

永井学校経営課長：はい。それでは、お二人の委員を、御着席をいただいております50音の順に御紹介をさせていただきます。

呉市長小村委員でございます。

小村委員：小村でございます。前はすみませんでした。

永井学校経営課長：続きまして、世羅町長山口委員でございます。

山口委員：世羅町の山口でございます。前は申しわけございません。よろしく願いします。

永井学校経営課長：本日は、18名の委員の皆様にご出席をいただいております。

なお、青木委員、赤岡委員、砂原委員、中川委員、毛利委員におかれては、本日は所用のため御欠席でございます。よろしく願いいたします。

坂越会長：では、早速、小村委員から、恐縮なんですけれども、今の若者、高校生をどう見ておられるか、あるいは、これから若い人たちにどういう力をつけ、どういう人材になってもらいたいのかというふうなことについて御意見をお伺いしたいんですが。

小村委員：わかりました。2つで3分ですね。

坂越会長：はい。すみません。

小村委員：市長になってから、若者に直接接するという機会がそんなにあるわけじゃありませんが、卒業式、あるいは文化祭等には、必ず出るようにはしております。印象としては、1つは、最近の高校生は素直だな、優しいなという印象です。一方で、気概だとか、あるいは骨太さというような、こういうものを少し感じなくなったかなという気がいたします。

私どもの高校生のときのように、かくあるべきだというような、建前というような意識が少ない。これは家庭で教えるということも少ないんだと思います。その一方で、我々の時代と違った新しい豊かな感性を持っているな、我々と違う感性を持っているなと、そんな気がしております。例えば、ビジュアルなものに対する感じ方とか、音感にしても、私どもの少年時代には、例えばバイオリンとかピアノの世界大会で優勝してくるというような者はおりませんでした。今は続々出てきますよね。私は、この感性が、新しい時代を生み出してくれるのではないかという期待を持っております。

「近ごろの若い者は・・・」という言い方は、平安時代から既にそういうことを言われておりました。永遠の世代間のギャップなんだと思います。我々団塊の世代も、昭和40年代には、「最近の若い者は・・・」と、こう言われたものです。平和であるということ、それから豊かであるということもあって、一見、無気力に見えますけれども、本質的には、それほど変わってないんじゃないかという思いがしております。

それから、どんな力を身につけるかということについては、いろいろな御議論があったんだと思いますけれども、私は、教育の目的というのは、小学校、中学校、高等学校、基本的には1つだと思っております。それは、将来、社会に出て自立ができる、その気

概と能力を身につけさせるという、これはあらゆる生物・動物に共通したもので、教育というのは、この基本を外してはいけないんだと思うんですね。ほとんどの場合、親は子どもより先に死ぬ、これは厳粛な事実でして、親が亡くなったときに自立できる、自立して食べていける、それができない子どもを残すということは、これは大変な問題でしてね。そこに家庭の教育も、学校の教育も、目的の大きなものがあるんだろうと思います。

以上を含めて、教育委員会に対して、私は日頃から3つのことを言っております。

2つ目は、我々は、日本人以外の者にはなり得ないんだということです。どこで暮らそうと、日本人以外の者にはなり得ないので、日本人が歴史の中で作り上げたよき倫理観、価値観、例えば勤勉であるとか、正直だとか、勇気だとか、潔さとか、こういうものを身につけさせるということです。3つ目は、みんなやりたいことをやればエネルギーが湧き出る訳ですから、その夢を具体的な目標にしてやって、それを意志に裏づけられた志にまで高めてやる、そういうものをつくっていくということを、私は教育の目標にすべきと思っております。

時間もまいりましたので、これでやめます。

坂越会長： いえいえ。また後ほどお願いします。

では、山口委員さん、お願いします。

山口委員： こんにちは。山口でございます。

私も、日ごろ、高校生に触れ合う機会というのは、そう頻繁にあるわけではないわけです。特に、世羅の場合は、世羅高校の生徒と触れ合うという、これは、まあ、日常的にはあるわけですが。小村市長言われたように、非常に優しくなっている、おとなしくなっているといいますか、世羅高も一時、式典に行けば、非常にパワフルでという時代もあったんですが、今は非常に落ちついて、そろってですね、1時間の式典も、ほとんど微動だにしないような状況があるということですので、指導する側にとっては、非常に指導しやすい状況というようにはなっておるんじゃないかなというふうに思っています。

しかし、一面、私がとらえてるのは、これは、まあ、若者一般という私の狭い視野の中でのとらえ方なんですけれども、1つは、幼さが非常に感じるという。私たち、先ほど小村市長が言われたように、団塊の世代、一昔前の高校生の時代から比べたら、幼い感じがする。少し、そういう意味では、軽いという言葉もそれにつくのかもわかりませんが、そういう思いがしています。

例えば、世羅高にも外国人の留学生、ケニアから見えてますけれども、この子たちの面構えとか、やはり構えというのは、相当強いものがあります。これは、特に、目的・意識的に来てるということもあるんですけれども、少し、それは精錬という感じをまさに受けるわけですが、少し、日本の子どもは、その中で幼さが感じられるということがあります。

また、私の子どもが韓国の青年との交流の中で感じたことを言っていたんですけれども、韓国の20代の青年が、日本に留学をして、同級生とは話が合わないと言ったんですね、日本人の。やはり、何を求めているかがはっきりしない。だから、自分の友達とは30代の人たちと、いろんな、日本人のですね。意見交換をするんだというふうなことを言っていたのを思い出しますが。そういうふうに、国際的にも見れば、日本、非常に幼く、大人しくなっているのではないかというふうに思っていました。それが、これからグローバルな社会の中で、日本をどう背負っていくかとなったときに、少し弱さが出てくるのではないかというのを危惧しております。

自治体としましても、多くの課題を抱えて事業を推進しているわけですが、特に、今、昭和40年代に就職をした、大量に就職した者が数年で大量退職という状況になってきます。そのときに、若い人たちに、まさにその中心的な指導部としての役割を担わせてもらうわけなんですけれども、住民いづれも賛成ばかりではなくて、地区を負って反対というような課題を住民の中に溶け込んで、どうその説得をし、リードし、その事業を進めていくかという観点に立ったときに、非常にその意味では、組織的な危機感を、私らとしても感じております。ここをどうつくり上げていくかというのは、高校だけではなくて幼児教育の時代からのたくましい生命力といいますか、挑戦力といいますか、耐える力といいますか、3.11など踏まえたときに、耐え忍んで立ち上がって継続をしていくという力をどう子どもたちに生命力として植えつけていくのかというのが、本当に日本の組織をこれから支えていこうというときに、非常に弱さ、まあ、私の場合、危機

感を感じているということが1つあります。ここらが、私は課題ではないかなという思いがしています。

坂越会長： ありがとうございます。

また、ほかの委員の皆さんの御意見を伺いたいと思いますけれども。少しだけ、ちょっと口を挟んで。

ある意味、わかりやすい程度のお話であって。外国の高校生と日本の高校生とからんでどうなんだろうというような視点ですね。これ、大学生も、基本的に似通ったところありまして、やっぱり留学してきている学生と、それから今ここで学んでいる広大生をこう並べてみると、ガッツがないんですね。意欲・姿勢ということで、やっぱりどうしても差が出てくる、そういう部分はやっぱり考えなきゃいけないかなというふうに思いました。

ありがとうございます。

## **協議1 (第1回の続き)**

坂越会長： ありがとうございます。

では、これから、前回の部分も踏まえまして意見交換をお願いしたいと思うんですけども、資料といたしまして、資料番号1になっておりますか。前回の協議会での皆さんの意見を整理したもの、それから、これは事務局のほうに御要望がございました、一体、日ごろの高校教育改革はどういう方向を向いているんだというところについての資料等、用意していただいています。ポイントだけ事務局のほうから説明をお願いします。

永井学校経営課長： それでは、資料番号1を御覧くださいませ。

第1回検討会議における委員の皆様様の御意見につきまして、御意見の趣旨をキーワードでグルーピングすることによりまして、協議の内容を集約・整理させていただきました。

資料の1ページ、2ページがその概要でございます。また、3・4ページは、各委員の御意見がいずれの集約意見に反映をされているかの対照表でございます。

資料の1ページを御覧ください。

委員の御意見を「本県を内外から支える人材」「高校生・若者の現状」「求められる力」の3つに大きく分類し、高校生・若者の現状につきましては「よいと思う点」「課題と思う点」「その他」に分類いたしました。

まず、本県を内外から支える人材につきましては、郷土の文化を知り、品性、経済力を身につけ、広島県から世界に発信できる人材、グローバル化に対応できる人材などの人材像が出されました。

続きまして、高校生、若者の現状のよいと思う点につきましては、素直でやさしい、指示されたことは確実に実行などでございました。

次に、課題と思う点につきましては、議論や競争が苦手、課題解決の体験が不足、じっくり考えることが苦手などでございます。

また、その他におきましては、目的を持って一生懸命何かに取り組む者と、そうでない者と二極化している。学校に馴染めず、学校に来ない生徒が、すごいエネルギーを持っていることがあり、何かの場で大きな力を発揮する可能性を持っている。そういう御意見でした。

最後に、求められる力につきましては、強い心、母国愛と郷土愛などの御意見をいただきました。

第1回検討協議会における委員の皆様様の御意見のまとめにつきましては、以上でございます。

次に、4月26日の第1回の検討協議会におきまして、今日の我が国における学校教育の大きな流れ、基本的な考え方などにかかわる資料の提出について御要望がございました。

資料番号2を御覧ください。

この資料は、文部科学省のホームページに掲載されている資料から、国における高校教育改革の動向等に係る資料を中心に抜き出してテンプレートをしたものでございます。概要を簡単に御説明させていただきます。

資料の1ページを御覧ください。

高等学校における教育改革は、高等学校への進学率の上昇に伴い、入学してきた生徒の多様化の実態に対応して、生徒の個性を最大限に伸ばすために特色ある学校づくりを行うとともに、個に応じた教育の充実を図ることが重要であるとして、高等学校教育の多様化を推進するさまざまな制度改革が行われて参りました。

平成3年4月の中央教育審議会の答申では「できる限り幅広く柔軟な教育を実施することが必要である」という提言がなされ、これを受け、総合学科の導入や単位制高等学校の全日制への拡大など行われました。また、平成9年の中教審答申では、それまでの「全員一斉かつ平等に」という発想を「それぞれの個性や能力に応じた内容、方法、仕組みを」という考え方に転換し、取り組みを進めていく必要があるという提言がなされ、これを受け、中高一貫教育制度の導入や学校外の学習の単位認定の拡大などが進められたところでございます。平成3年及び平成9年の中教審答申の概要と、平成に入ってから高等学校教育に係る主な制度改革を1ページ、2ページで御紹介をしております。

続きまして、3ページを御覧ください。

現在、国の中央教育審議会の初等・中等教育分科会において、今後の高等学校教育の在り方について審議が行われておりますが、これは、この分科会に設置をされております高等学校教育部会に昨年11月提出された資料でございます。国において今後の高校教育に係る審議が開始された背景には、現在の我が国の高校教育が抱えるさまざまな課題、例えば、中学校卒業後、高校への進学率が約98%という状況の中で、中途退学者や不登校、学ぶ意欲に欠ける生徒が存在をしていること、あるいは海外への留学生の減少など、内向き思考が指摘されていること。さらには、産業構造の変化、雇用の多様化、流動化に対応したキャリア教育の必要性など、そういった課題を抱えていることから、こうした状況を踏まえつつ、高等学校教育の理念を実現するために、教育改革の取り組みを一層進めて質の向上を図っていく必要があると考えられているものでございます。

3ページは、この高等学校教育部会で示されました今後の高等学校教育の在り方に係る検討課題の例でございます。

この資料の4ページ以降14ページまでの資料は、平成18年12月に公布・施行されました改正教育基本法のポイントがまとめられてございます。

また、15ページは、改正教育基本法第17条に基づく教育振興基本計画の第2期計画策定の基本的な考え方がまとめられているものでございます。

我が国の教育をめぐる現状という課題として、グローバル化や少子高齢化など、教育を取り巻く諸情勢の変化や東日本大震災を受けて、今後目指すべき教育の姿の方向性が示されております。

この資料の最後、16ページでございますが、本年度一部実施、来年度の入学生から本格実施となります高等学校学習指導要領の改定の考え方等が示された資料でございます。

この新しい高等学校学習指導要領におきましては、教育の理念を踏まえた生きる力の育成、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視、道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成ということを改定の基本的な考え方として、3にございます教育内容の主な改善事項が挙げられております。

資料番号2、国における高校教育改革の動向等に関する資料の説明につきましては、以上でございます。

資料番号3、4、5の資料につきましては、それぞれ本県を内外から支える人材の育成を検討していただくに当たりまして、参考としていただくための本県の特徴などが紹介をされております資料番号3。

今後、高等学校のあり方について検討していただくに当たりまして、参考としていただくための学校の系統図について、日本及び諸外国の学校の系統がまとめられました資料番号4。

グローバル人材に求められる能力について、県教育委員会が今後の教育施策を展開するに当たりまして、考え方を整理しました資料番号5となっております。

御協議に時間をとっていただきたいと思っておりますので、資料の説明は省略をさせていただきます。

事務局の説明は以上でございます。

坂越会長： はい、ありがとうございます。では、意見交換に移りたいと思っておりますが、まずは、前回の、この資料番号1が整理になっているんですけども、これ以外に、やはりここは検討しておこうということとか、あるいはひょっとして高等学校教育改革の文科省の方向性についての御質問もひょっとしてあるかもしれません。まずは、自由に意見交換を

行うということで、お願いしたいと思います。

西井さん、何かある？目が合った。

西井委員： ありがとうございます。

はい、失礼をいたします。

前回、皆さんが出された内容で、かなり重複してるところがあります、かなり多かったですから、言い足りてないというところに関しては、私個人的には、特にはございません。ここにまとめていただいた内容を中心に、最終的にはキーポイントといいますか、そういったところまとめていくような形になるのかなという気がしております。

坂越会長： ありがとうございます。

また、お気づきありましたら後ほどと思うんですが、今日はですね、少しく絞り込んで、ここ難しいんですけども、グローバル化にしても、その郷土の文化を知るといったことに関しましても、やっぱりこれは、それこそ日本の高等学校教育改革の、目指すべき方向ということでは、全国共通部分という言い方もできるかと思うんですよね。これを、広島県内の高校の課題に落とし込んだときに、どういうことが、例えば「広島県らしさ」というふうなことで言えるんだろうかと。広島県内の、もちろん国公私立合わせてなんですけれども、高等学校が担うべき人材養成、このあたりの観点で少し御意見がいただけたら。まあ、ここは本当にレベルがいろいろありまして、広島県といっても、海・山一括というの、これも難しいところではあるんですが、皆さん方のいろんな御経験の中からの御意見が出ればありがたいと思います。

はい。

小村委員： いいですかね。こうして、「広島県らしさ」ということで、こんな資料まで用意していただいている、ちょっと水を差すようなんですけどもね、これだけ単一民族で均質化された日本人で、あえて「広島県らしさ」ということを、そもそもそんなに意識しないでいいんじゃないかというのが、私の基本的な思いなんです。違いはあります。私はずっと東京で、全国からいろんな人が来て、県民のるつぼみたいな中で仕事をしましたけれども、確かにそれぞれにいろんな人がいました。東北の人は粘り強いとか言われますけれども、広島にも鹿児島にも粘り強い人がおられて、ほとんどが個人差に属するんじゃないかというような感じがするんですね。ですから、例えば、広島県の産業とか、そういうものに県内の高校生が就職をしたときに対応できる、広島県の産業の特徴とかというものに対応できるというような意味合いでは、少し高等学校で教えるときに配慮することがあるかもしれませんが、広島県人が特別に何か違った資質を持っているわけではないのではないかと。それでも、言えることは、基本的には明るいというようなことと、それから、比較的進取の気性に富んでいるように思います。これだけ東京へ行って仕事したがる県民性もないと思うんですよね。そういう志向が比較的強い地域だと思うんですけども。にもかかわらず、全員広島カープファンなんですよね。どこへ行っても、自分が広島出身だと平気で言い、そういったある種のアイデンティティーがある。県民によっては、自分がその県民、県の出身であるということ、言いたがらない人たちもいますからね。そういう中であって、広島県の人ほとんど100%自分が広島出身だということを平気で言いますね、ある種の誇りというか、そういうものを持っているように思いますけれどもね。そういったものが教育の中で何かの特徴的に生かせるかという、余りピンとこないんですけどもね。

坂越会長： ありがとうございます。

それはもう、本当にそのとおりで、広島県内の高校を卒業した人たちが、日本国中で同じように活躍する力を持ってないといけないし、グローバルに活躍する力も持ってなきゃいけないというのは、本当にそのとおりなんですよね。それと合わせてといたら、まあ、相手の言い方になるんですけども、やっぱり、自分たちが身近に接している環境の中で、地域の中で、そして目にしている高校生たちに対して何がやっぱりできるのか、どういう育ちをさせたいのかということについて、まあ、御意見があればというふうに思うんですけども。広島県の県人アイデンティティー。私、県外人ですけども、もう10年もおると完全にカープファンになりまして。いや、すみません。余計なこと。

では、指名してすみません。川野先生も、いろんな、それこそいろんな日本の中を見ておられて、広島県の中である意味、芸術的な活動にかかわっておられて、もし何か御意見ありましたら。

川野委員： 今日、宿題のように身近なところでグローバルに活躍する人ということがあったので、ふと誰かなと思ったときに、やはり大学にいと、やはり大学の研究者を考えて、ある

いは音楽家の人たちを考慮してしまうんですけれども、私、一番、この前たまたま話していてそうだなと思ったのは、作曲家の細川俊夫先生が広島出身でおられますが、現代音楽の作曲家なんですけれども、彼と話していたら、今度ドイツでまた作品発表があるからドイツへ行くんだと。この次はどこどこ行く、あそこへ行くという話をしていると、もう、彼が言うには、ドイツへ行くんでも大阪に行くぐらいのつもりになって、1週間の間で行ったり来たり、それぐらいの気持ちでないと自分も仕事を次から次へと抱えてるからおっしゃったんですね。周りにいた何人かの作曲家、あるいは私も、体、ようもちますねとは思っただけけれども、本当にグローバルに活躍する、あるいは向こうで世界的なファウンデーションのもとで共同生活をした体験もあるらしいんですね。世界の一流の人たちが、ある、それは音楽が違ういろんな分野の人たちが。1日に何回かの食事のときは一緒になって分野を超えて語り合う。そういう中で、また、いろんな構想とか、あるいは数学の人もいれば生理学の人もいるし、音楽・芸術の人もいる、そういう人たちがこう、いろんな意見を自由に言える中で、また自分の心、あるいは自分の哲学的なことが磨かれていくんだという話をされたのを思い出すと、もしかしたら、今、グローバルに限っていえば、高校時代、今、高校生のおきに、じゃ、今、グローバルに活躍している人が高校生だったとき特別な教育を受けていたんだろうかということ、また思い返したときに、それは英語力を磨くとかそういうのがあったかもしれないけれども、それほど、帰国子女でない限りは、あるいはこの前どなたか先生がおっしゃったように、古賀先生でしたかね。広島附属の生徒でも、外国の生徒ディベートをして、なかなか、もう歯が立たないんだという話を御披露されてましたけれども、そうなったとしても、仕事をしていく中で、やはり育てられていく、あるいは仕事を通じていろんな分野の人と戦うことによってグローバル人材って育っていくのではないのかなと。高校生のときに、そうするとこの会、身もふたもないんですけれどもね。高校生のときに、しっかりとこうやっつけていうことにならないだけども、いや、ならないなと思いつつながら、でも、先般言われたように、やっぱり1人で黙々と勉強する姿勢、あるいはオンとオフをはっきりさせて、人とコミュニケーションをするときには、やはり徹底的にいろんな人たちと語り合う、あるいはいろんな幅広く、これも皆さんの意見にあっただけども、幅広くいろんな知識、そしていろんな分野を、例えば3教科なら3教科しか勉強しないんじゃないなくて、もう幅広くいろんな分野について学ぶ機会をしっかりと与えるということが、やっぱり大事、本当にそれが基礎基本になるんじゃないのかなということを考えながらこうやってきたんですけれども。取り留めなく、いや、こんな急に御指名があると思わなかったの。そんなふうに思って今日は参りました。

坂越会長： ごめんなさい。いきなり聞きまして。

やっぱり、先生の話、本当に勝手に解釈しますと、いろんな高校生が経験できるような環境というか、自分の世界が持てるようなそういう状況をつくってやる。一方で、高校生としての基礎学力を保障することというのと、そこをどう具体の高校教育の中で実現していくかということもあるのかなというふうには伺いました。

もう、何か、グローバル人材の話になりかけているんですが、それでもやっぱりもうちょっとこだわりますね。

産業面でいうというのも恐縮なんですけど、やっぱり広島は物づくりとか、やっぱりありますよね。そういう人材という観点でいうと、長田委員さん、すみませんが、何か御意見を。

長田委員： 非常に狭い範囲しか、私、わかりませんので、産業界というところちょっと荷が重たいんですが。

グローバル化というのは、これはもう避けて通れない、今、時代になっているというのはわかるんですけれども、1つ、ここの会場には先生方が非常に多いんですが、やっぱりグローバル感覚を持った先生に教えていただいたら、子どもたちはその影響を受ける。反対にですね、PTAから、たまたま、今たまたま小さな町ですけども教育委員をやらせていただいて、角度は違っていろいろ見るようになると、余りここ、議事録まで残るから余り、問題発言かな、一番思うのが、やっぱり先生の元気がないですよ。それがやっぱりちょっと。もう少しやっぱりグローバルなリーダーシップの指導者がおられれば、子どもはぐっとなってくるんじゃないかなと。

それと、先般、ちょっと長々と変な日本語で、あと、議事録見て、本当、赤面したんですが、一つ言えるのは、グローバルで知識は確かについてますので、どんどん今日本の人は外へ出てます。だけどやっぱり、一番基本の、さっき市長が言っておられました

やっぱり日本人というベースが、どうも揺らいでいますんで、やはり、魂まで売って帰るといような感じで、冷や水を浴びているような、今、状況であります。その点を、ちょっと言いにくいことをちょっと言いまして申しわけないんですが。

坂越会長： ありがとうございます。

そういう御発言を受けると、前先生、申しわけないんですが、前先生が高校生に対して、学校の中で先生方のグローバル化、特に大事な観点だと思うんですけども、それはどういう形で可能になるのか、少し御意見があればお伺いしたいんですが。

前委員： 失礼します。

多くの学校がありますので、すべてのことは言えませんが、確かに言われたとおり、先生方のグローバル化というのは、意識の上では何とかしなくちゃいけないという思いは、皆さんおありのようですけれども、じゃ、実際にどうすればいいのかとか、どういうアクションをすればいいのかということについては、なかなかうまくいってないような状況はあります。ただ、今の時代ですから、留学生が学校に来たり、あるいは語学研修で教員に接したりというときには、本校の場合には、積極的に私は行きたいという先生がおられるんですけども、ほとんどが地歴の先生とか英語の先生などとかで、ほかの教科については、やはりコミュニケーション力というか、語学力が課題かなというように思っています。

だから、本当に、外に行くのが、海外に行くのがグローバルかというんじゃなくて、やはり、こう多くの学校以外の方々と色々なお付き合いをするところから、やはりやっていかないと、教員のグローバル化は進まないのではないかと思います。生徒以上にビビリですから。生徒は、失敗を恐れませんが、教員は失敗を恐れるというのもあるのではないかと思います。

生徒について言えば、やはり年配の方から見れば、あるいは自分なんかから見れば、グローバル化が必要だという声は大きいんですけども、生徒自身がその必要性がないとか、現在のところですね。だから、幾らかけ声をかけても、必要性のないものをあえてチャレンジしようとしなないとか、将来のためにやっつく、勉強はそうだと思うんですね。昔から言えば、何のために勉強するんだということ、大学に行って、いい企業に入って、安定した職をとというのが目的で、動機はいろいろありますけれども、そういうのであってもやってただけけれども、今は、割と、大学も大抵推薦になったりして、本当に何のために勉強するのということから話さないと、なかなか馬力を持ってやる生徒が育たないというのは、私は感じています。

つまり、やはり、グローバル化についていっても、やはり、この必要性というのを生徒が感じないといけない。本校の場合であれば、とは言え、最初のタイプのスタートとして、やっぱり交流という部分からスタートしながらそういう芽を育てる。実は、今日も、本校では理数コースでSPPというのがあって、広大から来ていただいた教授の先生ともお話ししてたんですけども、やはり高校であっても、そういう芽をやっぱり育てるべきではないかと。そういう芽をやっぱり育ててほしいということは、確かにそうだなというように、もし、今日、こういう場で発言するとなれば、そういうことをぜひ話したいですねという話をしてたところなんですけれども。何か、答えになっておりませんが、今の思いです。

坂越会長： いえいえ。ありがとうございます。

協議議題を、もう、すみません。最初に申し上げたように、2つに分けて、人材像とか求められる力ということと、それから、それを実現するために高等学校教育の在りようというようにお願いしようかと思ってたんですが、もう、具体的にそのグローバル化というような中身に入ってきてますので、少し、この会の流れを整理させていただきます。

協議議題の1としておりましたことについては、これはもう小村委員さんのほうから、やっぱり、ここは踏まえておかなきゃいけないことだと思うんですけども、広島県らしさということ、これを意識することは大事だけれども、それでは広島県だけで何があるのかということ、そこの部分はそんなに、そこを皮を向いていっても芯があるかどうかわからないという部分があるかと思っておりますので、だから、まあ、これは、全国的な動向を目指すべき方向、高等学校教育のあり方の中で、やっぱり広島県として何に力を入れるのか。ひょっとして、広島県でここの部分が欠けているところがあれば、やっぱりそこはちゃんとやらなきゃいけないだろうというような観点でとらえたい。その際、やっぱり、これも御指摘いただいて、ひょっとして、グローバル化、グローバル化のかけ

声の中で、日本人らしさというのか、伝統だったり、文化だったり、倫理観だったり、もっと広く言えば志だったりというような部分についてのその配慮、そういう部分が決して欠けることがないようにということで、まずは人材像のイメージを押しえさせていきたいと思っています。

## 協議 2 高等学校教育の目指す姿について

坂越会長： 協議議題の2のほうで、高等学校教育の目指すべき姿ということでお話をいただきましたんですけども、本当にこれも幅広い観点がございますので、まず、大きくは2つの論点に絞って、皆さん方の御意見をいただきたいと思っています。

まず1つが、先ほどから出ておりますようなグローバル化です。グローバル化に対応できるような人材を育成するためには、どんな教育が必要なんだろうか、どういうことをやっていけば、それが近づく道になるんだろうかということで、論点1。

それから、論点2は、これもその人材像の中で出てくるんですけども、リーダーですね。社会のいろんな分野で牽引していけるようなリーダーを育成するためには、どういう高等学校の取り組みが可能だろうかという、まずは、この2つの観点でお願いしたいんですけども、委員の皆様方には、できるだけ、申しわけございません。できるだけ具体的にといいますか、やはり御自身も含めて、周りにグローバルに、先ほど川野委員からもお話、紹介ありましたように、いろんな形で広島からグローバルに活躍されている方も御存じかと思っておりますので、そういう方のそのグローバルのありよう、そしてそういう方につながるような高等学校での経験、そんな観点でお話をいただけたらと思うんですけども。

さっき、資料の中には、それじゃ、グローバル、グローバルって何なのということについては、資料番号の5ですね。一応、委員会のほうで、こういう整理をしておりますよという一枚物の能力の事例を紹介してございます。コミュニケーションの力だったり、異文化理解、アイデンティティ、日本人としてのアイデンティティ、それからイノベーションの力ですね。こういったものが必要であろうということがございます。

では、御出席の委員の皆さんから御意見をいただきたいと思うんですけども、皮切りに、牛来さんから。すみません。

牛来委員： 牛来でございます。先ほどからグローバルというお話が出ておまして、私自身は起業家として、自分の身の回りで、じゃ、ぱっと一番に浮かんだグローバルな起業家の社長さんというのが、実は、広島の方ではなくて残念なんですね。お隣のファーストリテーリングの柳井社長、要はユニクロの代表です。そういったグローバルというとはっとそう浮かぶ、そこまでグローバルにいつているのかということと、実は、もう一つ浮かんだのが、何と言おうと、私の目の前にいる小さな小さな起業をしている人たちの中にも、翻訳家があり、通訳があり、それから帰国子女で頑張ってるメンバーたちもいるなど。教育、これから高校教育の中で、もちろんグローバルって大きく羽ばたくグローバルというところの部分を目指すという部分と、いや、でも、実際には、よく見たら目の前にいっぱいいっぱい、たくさん実はいるんだということに気づかなきゃいけない部分も、両方あるのかなというふうに考えながらお聞きしてました。ただ、大きかろうと小さかろうが、彼らの顔を思い浮かべたときに、やっぱり共通して感じるのが、夢を持っているという部分なんですよ。先ほどからお話の中に、まずはやりたいことを見つけてるところからだろうとか、何を求めているのかというのがというお話も出てましたが、では、具体的に何かこれをやりましょうという前に、環境を整えることももちろん並行して行いながら、まず何がしたいのかということを見つける人たちというのは、やっぱりそこをまず、自分が、グローバルって何かほど遠いよねと思っている子どもたち、生徒たちが殻を破るきっかけになると思うんです。

何が言いたいかというと、グローバル人材を目の前にしたときに、彼らは夢を持っているし、教育の中でも、まずはそこからなんじゃないかなというふうに思います。

じゃ、夢を持たせるために具体的なところで、前回もお伝えしたんですが、先ほど先生方がというお話も出ましたが、見本を見せるべきと思っています。先生方の中で、やはり夢を持っているというような、グローバルを語ることもですし、御自身がそれを見本として見せられるというところを、ぜひ進めて、どうか、していければいいなと思っています。

坂越会長： ありがとうございます。  
目が合った伊藤委員さん。続けて。

伊藤委員： マツダの伊藤でございます。

我々、弊社の場合は、自動車の製造販売というビジネスの関係ですが、国内でのビジネスだけでは当然やっていけない状況でございます。必然的に車を世界じゅうに販売するというふうなつながりでありまして、仕事の中で、私自身も、例えば、きのうはメキシコと会議があり、本日もロシアから来ている方との会議がありというふうな形で、いわゆる社内にグローバルな仕事、国境を越えた仕事って非常に多くございます。ただ、だからといって、自分がグローバル人材かと聞かれると、やはりそうではないというふうに思っております。グローバルに働いているということの中にも、単に国境をまたいで仕事をしているという状況と、本当にその文化、何か、民俗・人種の違いを越えて人間対人間のぶつかり合いをやりながら、本当に現地の人と心をつなぎ合っている状態というものには、もう非常大きな差がございまして、それができる方をイメージしていきますと、やはりその英語ができる、できないというところよりは、人としての魅力にあふれた方、あるいは人との距離が近いですね。自らどんどん人にかかわり合おうとしていく、そういう方が多いように感じております。その方の、やはり共通する特徴としては、自分自身というものが非常に確立されていて、先ほどもいろんな方からもコメントに出ていましたけれども、何をやりたいか、あるいは何を伝えたいか、これが非常に明確であるというふうに感じております。もちろん、伝え合う言葉として、例えば英語というものは必要にはなるんですけども、実際、我々がビジネスする相手も、英語が母国語という国の方というのは限定的です。ですから、もうはっきり申し上げて、中学レベルの英語で表現し合わない、逆に通じ合えない。でも、その中で、本当に伝えるべきことは何かというのわかっている人は表現しきれます。逆に、非常に語学力が高いものをお持ちの方でも、ここが不透明であれば、非常に流暢にしゃべっているように見えるんですけども何も伝わっていないという状況がございまして。ですので、グローバルのためにという特別な教育というよりは、私自身もほかの委員さん方も同じような意見が出ておりましたけれども、やはり自分自身を確立するというか、そういうところの教育、取組が必要なのではないかなというふうに感じております。

そのために何が重要かというところの具体的なところというのは、考え切れていないんですけども、やはり自身の可能性に気づくとか、動機・意欲、こういったものをいかに生み出させていくか、このあたりをしっかりと高校時代に育て、それをベースに、例えばその後で語学力ですとか、そういったものを身につけるのでも、全く遅くはないかなというふうに思っています。

坂越会長： ありがとうございます。

何か、教育の基本に立ち返っていくといいますか、やっぱり、自分をどう、自分をつくるか。自分をどういうふうに確認するか。

どうぞ、御意見をお願いいたします。

あ、では、すみません。

山口委員： 私は、今の御意見に賛成なんですけれども。広島県人というのは、それを意識しようとしまいと、昔から南米、ハワイなど、非常にフロンティア精神豊かに進出してますし、北海道にも広島の名前を冠した自治体が生まれるとかですね、広島県人会も、東京県人会では日本一ですからね。そういう目立ちたがり屋、リーダー、いろんな点があるんだろうと思います。惜しいというところまで行くとというので、あるというふうに思いますけれども、そういうものは非常に大事にして、この瀬戸内海的な気候がはぐくんだ朗らかさというのものも、一方あるだろうし、ロードスターだって、あの瀬戸内海気候がなかったら開発されなかったのではないかという人もいらっしゃるんです。ですから、そういうものは非常に大切にしていかなきゃならないと思いますので。今、言われたことに賛同するのは、私の町に、杭谷一東という彫刻家がいるんですけども、これは中学校卒業して、圓鏢さんの、これは御親戚ですけども、弟子に入って、日展に入賞したんですが、限界を感じてイタリアへ飛んだんですね。28歳で。言葉も何もわからない。馬小屋を借りてそこで住んで、水風呂に入って、草も食べたといいますが。今では、結構イタリアのほうで有名な彫刻家なんで、広島市内にも各地にその作品はありますけれども、その人の姿を見てても、やっぱり燃えるような、これをやり遂げたい、見ず知らずのところへでも飛び込んでいきたいというふうなすごいエネルギーがあったんだというふうに思っています。ですから、テクニックではなくて、そういうものを、どう私た

ちが育てていくのかというのが大切なんじゃないかなというふうに思います。

杭谷さんが言ってますけれども、時々帰って小学校とか中学校でいろんな話をするんですけれども、やっぱり子どものころに感性豊かに自然の中で遊んだことが、今、生きていって言うてますので。何をどのように感じるかということ育てないと、燃えるようなものも生まれてこないではないかなというふうな思いがしまして、ちょうど、私も、そんな疑問が出ていましたので、発言させていただきました。

坂越会長： ありがとうございます。

では、吉川委員さん。

吉川委員： 私、一番最初に、小村市長がおっしゃった自立という話ですね。私も同じように思います。福山市ですけれども、4年ぐらい前の市税が800億円あったのが、わずか3年か4年で700億円まで減りました。100億円減っておるんです。これは、固定資産税にかかる評価額の変更や、制度の見直しもあったから、一概に言えないと思うんですけれども、やはり、きちっと税金が払える若者を育てる必要が、一番あるんじゃないかなということ、私は思います。その中で、今グローバル人材の話もちろん出ましたが、それは、どの場所でも自分の力が発揮できる子どもが要るんじゃないかなということと、ある面では、英語を使ってグローバルに活躍していかなければならない人。地域でいろんな企業へ勤めながら、グローバルな視点で新しいものをその企業へとり入れて、そこで活躍できる人。そして地域で、子どもたちとか、いわばね、保育とか、あるいは老人に対する介護とか、そういったところでも人に優しい対応ができる子どもたち、それぞれ育てなくてはいけないんじゃないかなということ、私は思います。その中で、今、グローバル人材のことを話されておるといふふうに理解するんですけれども。

私も、先生たちが夢を語れば、非常にいいんだろうなと言いつつも、実は私の周りにおる者に、こんな人のおるんです。実際には、外国へ行って、グローバルに活躍しようなんてちっとも思っていない。しかしながら、金属加工のところで20年も30年もずっと物づくりにかかわってきたときに、すばらしい技術力を持ってきた知人は、「君は、外国へ行って、その技術を外国の労働者に教えてくれないか」というふうなことで、外国で仕事をしてきました。私は「君は英語しゃべれるのか」と言ったら、「全くしゃべれない。だけど、まあ、行ったら3年ぐらいで何とかなる。」と答えがありました。そして、帰ってきたら、しばらくして中国へ。「あんた、中国語しゃべるんか」「いや、ここも同じよ。人間と人間の付き合いで、何とかしゃべれる。」ある面では、そういったふうに、物づくりのしっかりした日本では、やはりしっかりと粘り強く頑張れる子どもたちを育成し、それが大人になったときには、それなりのものをつくっていくということは間違いないということ、彼から学ばせてもらいました。そういう意味でも、実際に、夢が語れることということも大切ですが、やっぱり粘り強く自分のことができる者を育成することが大切だと思います。

また、私どもとしても、福山は北京と教育交流させてもらってるんですけれども、やっぱり北京へ行った先生たちは、北京のすごい学校を見させてもらってびっくりします。これは頑張らなければいけないと。そこへ、20人ほどの中学生、高校生も行ってもらっております。高校生の県立の高校も何人か行ってくれておるんですけれども、やっぱり帰ってきたときに、その子どもたちの、意欲が変わってくるということ、よく聞きます。わずか20名ずつの子どもですけれど、直接見ることによって、その子どもたちの意欲が変わってくるというふうなこと、思っております。そういう意味でも、わずかですが、進めていってるわけですけれども、これはやはり先生の、あるいは子どもたち、体験というのとはすごく大きいなということを感じられます。

以上です。

坂越会長： ありがとうございます。

今日は、本当にたくさんキーワードをいただいて、私の勝手な解釈。事務局、ちょっとこれ、メモとってくださいね。やっぱり、地域人材というのと世界人材というのをつなぐという観点、やっぱり絶対抜けてはいけないと思いますので、地域で活躍できる人材は、これが世界へ通用する。ときどき聞く造語でグローバルという言葉があるんですよ。グローバルとローカルをつなげて、足元はしっかりローカルに根づいて、発想とか展開はグローバルにというような、そういう面も考えて当然いいのではないかと思いますので、ありがとうございます。

いかがでしょう。

はい。二見委員さん。

二見委員： グローバルという点、ちょっと私の教員時代の教え子の話を見せて……。現在50を過ぎておりますけれども。郡内の工場で働いておりますけれども、点滴の針の先をカットすることを専門にやっている人間がいる。彼は、中学生のときに、私、理科の教員ですから、理科は100点、英語と数学は0点というレベル。理科だけしかできない。理科はできるという。同じ食塩の濃度の問題を数学で出したら解けないが、理科だったらとれるというタイプの人間だった。彼は、みそ会社のベルトコンベアのロボットをやったりしながら、今の会社に移った。彼は、技術屋であり、電気パーツを組み立てる力を持っている。大学の工学部を出た人が設計図を書くんですけども、この設計図では動かないといっても、大学院を出た人は言うこと聞かないと。自分で勝手に設計図以外の自分の頭でパーツをつないでロボットつくる。そういう人間なんですけれどもね。彼が、だんだん仕事がなくなって、今は、バンコクとか中国に行ってますけれども、英語が0点でございますので、知っている言葉や理科に関する英語単語だけでしゃべっていると。しかし、彼は、全部通用するんだと言ってます。それは、自分が向こうで技術をどう使いたいかという、この思いを出せば通じるんだということですね。やはり、一芸に秀でるといいますか、数学はできないけれども、理科だけはできる。

同じように、もう一つ、話変わるんですけども、私、前回、私の町の学校では、高校では、中学生も含めて、周りの職業が限られている。土建業と保母さんと、看護師さん。だから、将来の像を描こうとしたときには、余り素材がないわけです。そして、本当に今の県内全体の高校生がどう考えているかですが、大学進学等を含めたら、かなり国公立、私立、専門学校入れれば60%、50%超えているわけです。高等学校を出ても、社会へ通用するという自覚を持って勉強している子がどれぐらいいるんだろうかなと。何かあるんじゃないか、まあ、お父さんやお母さんのやっている仕事ぐらいを描けば専門学校へ行けばいいのかなというふうな感覚で勉強していたら、さっきの100点の、理科の100点のような子はできてこないと思うんですよ。ですから、そういう——今の高校、例えば普通科で卒業したら何ができるというふうなものが、地元の高校生たち、余り描けてないんじゃないか。そういう点は、やっぱりこれから、この今後の高校の在り方にも感じるんですけども、そういう点、ちょっと非常に心配になってまいります。

それから、もう一つ紹介します。

私の町に、町のかじ屋さんというのがあります。今日、テレビの放映があるかもわかりません。広島市立大学の大学院の金属工芸を専門にやっていた学生が、80歳ぐらのかじ屋のおじいちゃんに弟子入りをして、その鉄工所、かじ屋を、今、継いで、これから町のかじ屋さんやっていく。彼には、今まで大学院で芸術的な鉄の工芸を手がけてきたけれども、これから初めて玉鋼を使って、鋏や、鎌もやっていこうと。自分の鉄の世界を、小さなかじ屋で広げようとしている。これも、私、立派な彼だけの世界だと思うんですよ。そういうふうなものを、町や、あるいは学校、後押しできれば、私はすばらしいんじゃないかな。そういう点では、今の大学の先生が、小さな町を見つけて、彼とおじいちゃんを結びつけたというふうなこと、やはり、若者が夢を持って志を持ってやっていくときに、それをつなげるものは何か。地域として、学校として。そしてから、その秀でたものをどうやって引き伸ばしてやれるかというふうなことが、大事なのかなと。それは、決して国を出て世界へ羽ばたくということにならないかもわかりませんが、そういう一つの鉄の世界であったり、技術の世界というものを、やっぱり描ける高校生にしていきたいなというふうに思います。

ちょっとまとまりませんが、よろしく願います。

坂越会長： いえいえ。ありがとうございます。

技術だったり物づくりだったり。たくさんお話しいただいた中で、これも事務局に投げとくキーワードなんですけど、普通科、高等学校普通科、いろんなデータがあって、だんだん専門高校から普通科の定員のほうがふえてきていると。一般的に、大学進学だったり、なんなりというんですけども、彼らが持つべき目というのか、将来像というのはどうやってサポートしてやれるのかといった観点も、今のお話からあるのかなというふうに思いました。ありがとうございます。

もう少し、グローバル人材について、いかがでしょう。

小村委員： 少し焦点を絞らなきゃいけないと思うのは、今は、98%高校進学するという世の中ですよ。その子たちを対象にした教育のあり方というものを、今、議論をしているわけですから、みんながみんな、グローバル化に対応した能力を身につけられるわけではないという現実を踏まえておく必要がある。私は、市長になって10回くらい結婚式に出

ましたけれども、4回は相手が中国か韓国の方とか、そういうふうになってきました。私どもの地方都市でも、そういうことが当たり前になってきたんだなと思います。そういう中で、広島にいても、あるいは県内どこにいても、日常的なグローバル社会に対応ができる大人にしていくためにどうしたらいいかという観点と、もうひとつ先ほどの、国際社会でまさに活躍できるというような、こういうものをイメージした教育のあり方というものと2つあるんだと思うんですね。その辺のところを、観点を整理して議論をしたほうがいいんじゃないか。繰り返しますが、中学生のほとんどが高校へ行く。その子らが、みんなグローバル化に対応できるような大人になるとは思えないんですね。また、身もふたもないようなことを言いますけれども。そういう社会になるんだよという基本的な知識は、意識として与えておく必要があると思いますけれども、それでも必要があれば、それは対応していきます。だから、先ほど来、議論しておられる、そういう基礎的な能力さえ身につけておけば、これには対応できるんじゃないかと、そんなふうに思っておるんですね。

坂越会長： ありがとうございます。整理をしていただきました。

これも若干私の意見が入ってしまうんですけど、やっぱりグローバル化ということが、すぐこれだけ言われるようになってきているというのは、ある意味、避けて通れないという。だから、中学生、もう98%が高校生、もう50%が大学生も、この世界で生きていかざるを得ない。それに対応できるだけの力をやっぱりつけておく必要があるだろう。さらに、その中で、世界、グローバルに活躍できる人材というか、リーダーシップを発揮できる人材というものを、どうやって伸ばしていくのか。まあ、2つ確かにあるわけですけどね。私たちのこの会合が考えるべきは、やっぱりどちらもあるんだろうと思うんです。やっぱり、国公立、県内高等学校として、普遍的に身につけるべきグローバル資質能力といいますか、対応力といいますか、それも必要でしょうし、それから、そこから飛び出て、自分自身がグローバルに活躍していくという、そういう力をまたつけることも必要ですね。

すみません。今、小村市長さんにうまく整理して下さったので、一たんここでちょっと置かせて。

また戻ってもいいんですけど、もう一つの論点で、ちょっと、今の話のほうで言うと、その後半といいますか、社会の中でリーダーとして、グローバルリーダーであり、ローカルリーダーでありというのがあるかと思うんですけど、本当にこう、先導的に志を持って引っ張っていきけるような、そういう人材を養成する。それに高等学校教育がどう関与できるのかといったこと。まあ、まずはその、リーダーということ自体が、先ほどの話で言いますと、本当に地道にコツコツと、自分の世界で物をつくり上げるというの、とってもいい生き方、評価されるべき生き方。しかし、人と関わりながら、その人たちを組織していくというか、引っ張っていくのも、また、これ社会にとっては必要な人材というふうに考えるんですね。

議員さんの立場から言うたら何か変な質問ですけど、やっぱり、社会、地域社会のリーダーというのがあるわけですので、すみませんが。

富永委員： 私、ちょっとその前に、ちょっとどういう教育がいいかというのは、現場の先生に、私は本当は聞きたいんですが。

その前に、小村市長の発言に、私も同感する部分があるものですから、それに関連しましてちょっとお話しさせてもらおうと、高等学校の生徒も、県下さまざまな能力や個性・適性、あるいは将来は希望する進路とか、さまざまな生徒がいるわけですけどね。それが、県内、中山間地域、あるいは都市部、それぞれの学校に在籍して学んでいるわけですがね。それを、こう全部、同じような方向に育てるということは、これは当然のことながら考えられないことで、私は、基本的には、将来、将来例えばグローバルに活躍する舞台に出たときに、やってやろうと思ったときに対応できる力を高校のときにつけておくと。これは、何もこうグローバルだけの話じゃなくて、ほかのいろんな夢を持って挑戦しようとしたときに、頑張ろうとしたときに、ベースができてなかったら思うようにいかない、挫折するといったようなことがないように、あるいは可能性が少しでもあるように、基礎をつけてやるのが必要んじゃないかなというふうに思っております。

それから、リーダーというのが、ちょっと私もよくわからないんですが、ただ、広島県のために、広島県を支える人材ということじゃなくて、やっぱりこう、政治でも経済でも、金融系でもそれからスポーツでも、いろんな分野で、音楽でも芸術でもですね、

いろんな分野で羽ばたいてやろうというような、意欲を持った生徒は、その意欲と能力を持った生徒は、それを最大限にその力を伸ばしてやれるような体制も学校の中につくっていく必要があるのではないのだろうかというふうに思います。

まとめませんが、以上です。

坂越会長： いえいえ。ありがとうございます。

御意見を、ぜひお願いいたします。

もう、何か、リーダーとかってもう限定してしまいましたけれども、決してもうそれだけに限らずに、やっぱり、これからの社会に必要な人材というイメージでお考えいただければと思うんですけれども。

はい。

川野委員： 私は広島に来て28年です。その前はずっと関東でした。広島に来て、平和教育というのがすごく盛んだと思ったんですね。今、広島という地名は、海外行っても、私もいろいろ行きましたけれども、やはりよく知られた、東京、大阪、京都あたりの名前は知られているとしても、やはり広島が海外ですごく通るんですね。そこから来たというと、次に言われるのが被爆のことなんですね。以前は、私は、来たころは、関東から来て、いつまでも、先ほどの話とあれしてはいけないんですが、カーブとか、被爆のこととか、そういうことがすごくクローズアップされ、いつでも頭にあるのは、それから、やっぱりもう少し変わっていかなきやいけないのかなという気持ちもあったんですけれども、20年以上広島にいますと、反対にそれについてやっぱりもっと、野球だろうが、あるいはこの平和、文化、この都市の大切さというのを知らなければならないということが、住めば住むほど思うようになりました。ということは、教育の中身は、教科としての教育については、それは広島独自のものというのとはなかったとしても、そういう平和に関してとか、そういうことをちゃんとディベートできる、語れるような教育というのが、この本県の中にやはりどうしても欠いてはならないことなのではないかなと。それは、小中レベルでなくて、やっぱり高校生レベルになったときに、海外の子どもたち、生徒たちと対等にいろんな形で語り合う姿がないと、将来の政治に関して、すごく心配な気持ちになります。だから、平和というのは、ぜひこれからも、その教育内容は、高校の中でも入れていただければと思います。

それと、もう一つ、これ、資料5なんですけれども、この高等学校のところにあるのは、実際どれぐらい達成されているのかというの、もし、あれば、各学校等で、こういうふうにかかれていたことがどのように実行されているのかというの、また、いつのときか聞かせていただけるとありがたいと。

坂越会長： ありがとうございます。

私のほうから、まだ、学校関係者の皆様への御指名をしていないんですけれども、実は、後にとっておいてございまして、グローバル、あるいは社会のリーダー、そういったことについての、高等学校での取組等がございましたら、後ほど紹介していただくという予定にしておりますので、ぜひ。

もう少し、この社会のリーダーといえますか、先ほど内向きというようなこととかもあったんですけれども、もっとこう前へ出て、自分を持って引っ張っていくような、そういうリーダー像。やっぱり、皆さん方の身の回りに、こういう輝く人がいるとか、こういう人はこういうところで、ある意味、人生のきっかけになったんじゃないかというようなこと、もし御紹介いただきましたらありがたいんですけれども。いかがでしょう。

はい。加藤委員さん、お願いします。

加藤委員： P T A連合会の加藤です。身近な話もしたいんですが、その前に、まずですね、基本、この会議は何のためかなと、今、考えながら聞いてたんですが、非常に、皆さんの意見、そのとおりで思いながら聞きました。そのときに、今、今の普通科高校と今会長が言われたのをちょっと思い出して、そうか、普通科高校って一体何をする学校だったのか思ったときに、非常に身近に思いました。それは、今、普通科高校というのは、全部、ほぼ全部ですね、大学の予備校になっています。大学進学のための予備校です。というのが、私の地元でも普通科高校に行っている、もう校長先生も親御さんも、みんな関心事は、今年は何%国公立大学に進学したか。それが今全国で何番になっているかということが一番の話題になります。ほかの就職をした、うちの子どもも、実は、その進学校に行ったら就職といいますが、専門学校に行ってしまったんですが、それは先生方に大変お叱りを受けました。この学校は全部受験をして、国公立にたくさん行ってもらうなといけない高校なんだと。でも、そういう現実があったところから、今、変わろうと

しているんだということを、すごく思います。

それと、普通科高校が自立するというとはどういう姿なのかということ。我々が、リーダーを持ってグローバル化を持った高校生、高校教育をするということは、大学の予備校という現実的な姿から、その一つ志を持った、リーダーの要素を持った子どもたちをどう育てていくかという話をされているんだろうなというふうに思いますが、我々保護者の中では、まだ普通科高校というのは、いい大学に行くためのステップであることは否めない事実ということでもあります。

それから、もう一つ、全然違う話ですけれども、私、尾道市内なんですけど、おもしろい先生が来られました。陰山英男先生という百マス計算の先生ですけれども。尾道の教育会挙げて、小学校が廃校になるといったときに、土堂小学校という小学校ですけれども、全校生徒が67名。もう複式で廃校になる、決定していたところに陰山先生来られました。その百マス計算ということで、とにかく基礎基本をやる、挨拶をする、そのことだけでその学校は再生しました。今は350人ほど尾道から集まってきて、それどころか、英検でも日本一。この前、ホームページで日本一といましたけれども、何回日本一をとったかわからない。でも、その先生は、自分たちができるんだということを、その生徒に常に教えていました。

それから、もう一つ、おもしろい先生が尾道にいます。

大越俊夫先生という、師友塾といいまして、学校、不登校になった子どもとか、高校を中退した子ども、それから高校を卒業して大学に行ってニートになっているとか、引きこもっている子どもたちを面倒見ている高校、学校です。そこで、その高校生の生徒たちや子どもたちを完全に再生します。全部が全部じゃないですけれども、この前、最近でいうと、この前の欽ちゃんの仮装大賞で2位をとりました。それは、その2位をとった子どもたちが、普通の子どもたちじゃないんです。家も出られなくて、学校にも行けなくてという子どもたちが、そういうふうに生まれ変わっていく。ということは、リーダーを育てるには、やっぱり、リーダーの要素を持った指導者が絶対必要なんだということを思います。その指導者をどう見つけてくるか。そのリーダーのもとで育った人たちは、きっとその大学の予備校的な高校ではなくて、一つのアイデンティティーを持って、自立心をもっていけるんじゃないかなというようなことを、ちょっと考えながら、お話を聞いていました。

以上です。

坂越会長： ありがとうございます。

やはり教員は、やっぱりかなめですな。

三好委員さん、いかがですか。

三好委員： つまるところ、リーダー像にもなっていくのかなと思うんですけれども、うちは、必ずしもトップに立って、グイグイとみんなを引っ張っていく人がリーダーだとは思っていないんですね。リーダーの要素も一つではあるけれども、もっとほかの要素もリーダーには求められるのかなというところで、大方の人にリーダー、そういう立場の、リーダーの立場に立とうと立つまいと、リーダー的要素として持っておいてほしいものの一つに、まさにグローバル化に通ずる相手を認め、相手の力を生かしていける人というのがあると思うんですね。違った相手を見きわめ認めて、サポートもできるリーダーの一つの力というところなんですけれども、そのためには、やっぱり本人がかなり自己肯定感を持っていないと、相手を認めてサポートするということはできないのではないのかなと思うんです。高校時代に、どれだけ子どもたちが自己肯定感を膨らませて卒業できるかということが、社会に出てしっかりそのグローバルな視点を持って生きていけるかということにもつながるのではないかなと思うわけで、じゃ、どうしたらいいのということなんですけれども、いろんなやり方があるとは思いますが、その一つとして、学校の中だけじゃなく、高校時代、10代の後半に、しっかり社会の組織とかかわるチャンスをつくってあげる、そういう場をつくってあげることが必要じゃないかなと思うんです。そうすると何が起こるかということ、学校の中とは違った評価の視点が、そこにあると思うんですね。そうすれば、そういった場面で認められることで、成績は悪くなくてもそういった社会とのかかわった場面で何か認められたことが、本人の自己肯定感を強くしていくことにつながっていくのではないのかなと思うんです。学校教育の中でどうするかということをごここでは論じるわけですけれども、学校教育だけでどうするかではないというところで、社会との関わりというところを、やっぱりもう少しチャンスを増やしてあげるとよいのではないかなというふうに思います。

坂越会長： ありがとうございます。

その話になると、やっぱり寺西委員から、やっぱり実践されている部分もあるんじゃないかと思うんですが、いかがでしょう。

寺西委員： 先程からお話を聞かせて頂きながら、本当に全くだなという思いです。

子どもたちと海外にホームステイした時の事です。電気が通っておらず、水道もない村でした。手も洗わず 材料も洗わず、料理をされる。まずその状況に子どもたちはブルーになっていました。そしてある日、朝起きたら家の裏で鶏をさばっていました。見る事は強要 はしませんでした、泣く子やその後の食事が喉を通らなかつたり。

けれど、その鶏は現地の方々にはとても大切な貴重な鶏だったのです。本当に心の込められた思いやりのおもてなしの鶏でした。その話を知った時から子どもたちは変わり始めました。

もちろん、子どもたちは様々な環境の中で育って来ていますので、受け止め方も様々ですが、いつも通りの暮らしの中からまた違う環境の中に置かれると、人の優しさに敏感になる事が多々あります。

今、凶鑑というものが大変流行っています。なぜか売れる時代がやって来ました。日常茶飯事に起こる事象、人間力を試すもの、例えば雑巾の絞り方は？など、常識と言われる類いの事が今求められています。親が親として当たり前前に教えてきた事が活字となって示される。学校生活の中でも、なかなか得る機会がないという、悲しい現状です。生きる力を身につける場が文明の発展とは反比例して乏しくなっているように思います。

中学、高校と学校に行けなくなった男の子がいました。ご存知の方もおられると思いますが、その子は、時折近所のミミズを研究している人の所に行くようになり、生き物に興味を持つようになり、色々な本もめくるようになり、地道な生き物の研究に没頭し観察力も養われ、さらに海外の著書も読むようになり、自然に英語の読解力も付いてきました。そして、大学の学長さんにまでなられたのです。どこで何をどのように学ぶか。いつどんな人と出会うか。意欲 興味を持つことにより、道が開かれます。子どもたちに自慢できることや得意なことはと聞くと答えられない子どもが近頃多くなりました。先生方にも聞くのですが、得意なことをあまり答えられません。ないのではなくて、人の前で断言せず、目立たない事が、自慢しない事が美徳のように。「これが得意です。」と自慢できる事を一つ持って頂きたい。世界 が広がります。自信が沸いてきます。様々な力を生むと思うのです。

学校の 高校の生活や授業の中でとなったとき なかなか見つける事はできないかもしれません。学校現場だけではなく様々な地域や活動の場において機会を与えられるだけでなく、求めて行ける力を育む事も大切だと思います。

幼児教育の場でも放任保育ではなく、まずは見守る、待つ保育をします。けれど様々な種まきをすることは忘れません。どのような事に興味をもつか？自らが意欲を持つ瞬間を大切にします。

高校生活においても様々な意欲を育む機会や生き抜く力を身に付ける活動を大切にしたいと思います。

坂越会長： いえいえ。ありがとうございます。

それはもう、実態のところかなというふうに思います。

これも、私がまた勝手に余計なこと言うんですけども、グローバル人材能力という、英検2級だとか、TOEFL何点だとかってすぐ言うてしまうんですけども、やっぱり、公教育としての機能というか、基本的にそういう、いろんな困難を持ちながら勉強している子どもたちを支えるという観点は、やっぱりこれは絶対県内高校の役割だろうと思います。

学校教育の現場よく御存知の先生に何う前に、西井さんに。いや、発言はあるだろうと思うんですが、私からちょっと、ちょっとだけ、プラスリクエストがあるんですけども。

今、リーダーシップという話をしてますよね。企業で、それこそマネジメントやリーダーシップというよう、まあ、絶対必要だと思うんですけども、そういうマネジメントというのを学校教育の中でできるんだろうか。大学生で体育会のサークルのキャプテンやってたら、企業は採用をしてくれるなんていうの、本当かなと、通じるのかと思ったりするんですが、ちょっと教えていただければ。

西井委員： はい、ありがとうございます。難しい宿題をいただきました。

その前に、冒頭でありました広島県の特徴とかというふうな話もありましたので、そのあたりから私なりの考えをお話しさせていただければなというふうに思うんですが。

広島県人らしさって何なんだろうなと思いつつながら、皆さんのお話も聞かせていただけてたんですけども、私がよく県外の方あたりとお話をしてと言われるのは、広島の人とはとにかく熱い。行動力がアグレッシブで、とにかく思いが熱いんだと。というふうに言われています。何でそういう言葉を受けるんだろうなというふうに思いつつながら、私、ここ、広島の中を見据えてみると、これは広島市民なのかもしませんが、原爆から立ち上がったその思い、志。カーブの樽募金。何としてもつぶさせない。我々が作り上げる。その思いで作り上げられたのが、市民球場であったわけです。先日も、私の子ども、小学生なんですけど、小学生のPTAの親の懇親会で食事をしたときに、ある、あるというか、私の隣に座っていらっしゃったお母さん、保護者の方なんですけど、何の話で盛り上がったかというところ、竹島・尖閣諸島含めた国土の問題で、親同士がわあーと盛り上がってですね、これはおかしいとか、もっとこうするべきだというふうな話で盛り上がったんですけど、やはり、そういった一つ一つのものに対して熱い思いを持っているというのが、一つの広島らしさと言ってもいいのかなという気もしております。そういったベースで考えながら、先ほどのグローバル化やリーダーシップ、これ、私、かなり関連してくるんだろうなというふうに思うんですけども、このグローバル化、確かに語学力ということもあるんだと思うんですけど、私は、その海外へ行くということだけではなくて、壁を壁と感じない人。やはり、これまた行動力だと思うんですね。失敗を恐れない。とにかく、その自分のやりたいことに対して突っ走る思い。こういう思いがあれば、海外に行ったら何かチャレンジをするということに対しても、チャレンジをしていくんだろうというふうに思います。じゃ、そういうことを考えながら、リーダーシップって何だろうというふうにとらえたときに、これは、私の中で好きな言葉で、たくましい船乗りは穏やかな海では育たない。アグレッシブなところで人は育つんですということと、リーダーというのは役割ではなくて、リーダーは、相手の目の中にいる。要は、あなたがこういう役職を与えるから、リーダーとしてやりなさいねではなくて、絶えずみんなが見ている人がリーダーだ。この人みたいになりたい、あるいは、この人のこういうところの行動、発言は参考になる。そういうふうには、絶えず意識をされている人がリーダーなんだというふうに言われている言葉があるんですね。これが、非常に私の中でも好きで、やはりそういったことを考えると、自分自身がどうなりたいという目指す姿、ありたい姿、それに対して、やはり一生懸命その像を求めて、追い求めて行動している人、そういったものがやはりリーダーシップであり、あるいはそういった人がグローバル化をつくり上げるんだろうし、また地域というものをつくり上げていくのかなという気がしています。

じゃ、そういったものをということになってくると、先ほどいろんな方もおっしゃられてましたけれども、やはり教員の姿というところ、そこがやはり、教員自身がそういった、先ほどの大阪に行く感覚で海外に行かれるとかいう話もありましたけれども、そんな行動がとれているかというところにもなるのかなという気がするんですけど、逆に言えば、教員の方がそういう思いを実現できるような教育現場になっているのか。今回の県の教育委員会の皆さんが音頭をとっていただけてますけれども、教育委員会と教育現場というところが、うまくその辺が、先生が行動できるような体制になっているのかなということも、逆に感じます。私の中学・高校時代の恩師あたり、いまだに食事行ったりしますけれども、先生が何かぼやいたときに「先生、なんか昔らしゅうないね」というような話をしたら「今は大変なんよ」というようなことも耳にしますので、やはり、そういったこともあるのかなという気もしております。

じゃ、そういったものが学校教育の中でということになってくると、企業人、企業の中で、やはり部活をしている人のほうが、会社の中で、前回の議論ではないですが、指示待ち族ではなくて、自分で何をしようというふうに見出していけるというのが、これは事実だろうと思います。やはり、体育会系の方、特にそうだろうと思います。これ、なぜ、何ゆえかなと思えば、先ほどの話と一緒に、どんな像になりたい。それを部員とともに、じゃ、話し合っつて、じゃ、どういった形で実現をしていくかというの、クラブの中で練習メニュー含めて、全国大会なら全国大会目指すという中で、どこが課題だということ自分たちで現状分析をして、それに対して、じゃ、どういう練習を組んでいこうと、これ、まさにもう経営の理論とドラッカーあたりの理論と、もうまさに一緒になってくるところだろうと思うんですけど、そういったものを、まあ、ドラッカーと

いう言葉は知らないなりに、実はそういったことを学んでいるというのがあるんだらうなという気がしますので、これが部活以外のところの中でも、そういった目指す姿と現状分析と、それに対する解決策というものを見出していけるようなものというものが入っていけば、これはリーダーシップなりグローバル化なり、あるいは企業の中で活躍する人材なりというものが育っていくのかなという気はします

すみません。取りとめのない話になりましたけれども、以上です。

坂越会長： いえいえ。ありがとうございます。

それでは、お待たせしました。いろいろ御意見をいただいた上で、それじゃ、今、中学も含めて、高等学校の中でどういう取り組みがあり得るのか、また、そういう事例があるのか、さらには可能であればこういうことが今やりたいというようなことも含めまして、すみません、中学校からお願いしてよろしいでしょうか。

佐々木委員： はい。それでは、失礼します。

先ほどから、いろいろお聞きしながら、階段を1つずつ上がっていつているなという感じがしておりますが、的を射ないかもしれませんが、私自身は、実は、今回、中央教育審議会の中身について、つい先週、東京で理事会があってですね、そこでいろんな報告を聞く中で、これが一つのキーワードになるなというのが、「学び続ける教師、学習し続ける教師」という言葉が随所に出てきています。これは、本当に私も我が意を得たりという感じで聞いておったんですが、実は、私のところも含めて、広島県内の中学校で朝読書というのをやっておりますけれども、実は、なかなか子どもたちが本を読まないということがありますが、私なりに思っているのは、それは、やっぱり先生が読んでないのではないかというふうに思っています。先生は、率先垂範ではないですが、やはり目の前に子どもたちが過ごす時間というのは、やっぱり学校、かなり長い時間ありますので、やっぱり目の前の教師から、言葉ではなくて、あるいはいろんなものではなくて、感じ取るものというのがあるのではないかと思うんですね。私も、本を読まなくなったら、あるいは自分で学習することをしなくなったら、教えることはないよということを行っているんですけども、そういう意味では、今回の新しい指導要領の基本コンセプトのところ、生きる力というふうになってます。これは、変わっていないとありますが、ある報告書を読みますとね、このもとは生き抜く力という言葉だったんだというふうに書いてあったのをちょっと見て、ああ、なるほどなと思いました。今、これだけ社会の変化が激しい中で、どうやってこう、先ほど影という話がありましたが、実は、壁というのも、お隣の人にとっては、それは壁でも何でもない場合がありますね。私はだから、壁というのは、むしろ自分が壁だと思っているのではないかなというふうに思っているんですけども。そういう意味では、学び続ける教師、学習し続ける教師というのが要ると思います。

それから、もう一つは、グローバル関係の分では、やはり基礎的な学力知識については、先ほど川野先生から、ちょっと中学校、学校の方どうですかというのがありました。今、ここに書いたような形で、本当にいろんな、最近、検定関係がかなりたくさんあります。こういったところには、かなりチャレンジをされているところも、県では多いですね。私のところも、中学校卒業するまでに検定3級をとるとかいうようなことでやっているところもありますけれども、今、本当に何でも社会科も数学も、国語も漢字も、いろんな検定があります。そういったところも含めてですが、やはり、そういう基礎的な、何となく身につけ、さらにその次にそれをどう生かすかというところでは、やはりある心理学者の方が、リレーション能力という、人と人の関係をいかにこうつくっていくかというのが、コミュニケーション能力とも言われてますが、その人間関係をいかに切り結んでいくかというところが非常に重要だというふうに言われてますが、そこらも視野に入れていく必要があるのかなと思います。

あと、最後に、一つ、釈迦に説法で、経営をされている方には、ああ、あの方がということでしょうが、アメリカでナポレオン・ヒルという方が、成功哲学というのを理論化して、思考は現実化するという本を書かれております。これ、ベストセラーになったというふうに聞きましたが、この中にあるのも、やはりそういう、なぜ成功しているのか、うまくいつているのか、その思想、考え方、行動というのがどうなのかということですね、学ぶところが多いなと思っています。

それと、先ほど先生のことというのがありましたが、やはり、私もあるときに、ミラーボールのような先生であれというふうに言われたことがあります。いろんな子どもたちがいます。いろんな子どもたちにその光を当ててやるという視点なんですね。特定のとこ

ろではなくて、全員に光が届くというような教師であれというふうに言われて、まだ今、ちょっと印象に残っています。

本当に最後ですが、リーダーというのは、私は、最後には自らが自分のリーダーにならないとだめだというふうに思っています。やはり、勢いがついたときに、やることがわからないから、今、何もやらないというんじゃないで、好きなものが見つからないから、いろんなことをやって、体験をして、見つかったときに全力でサポートできるという力をつけてやりたいなという感じがしています。今、これは、広島県も基礎・基本の定着状況調査、全国学習・学力状況調査というのをやっていますので、これは、もう全県を挙げて取り組んでおるところですので、成果が出てきつつあるのではないかとこのように思っております。

以上です。

坂越会長： ありがとうございます。

では、すみません。武田委員さん、よろしくお願ひします。

武田委員： 学校現場で具体的にどんなことをやっているのかということなんですけれども、私立学校、39校ございますが、それぞれ、もうさまざま取り組みをしているんだろうと思います。そのすべて私が把握をしているわけではありませんので、その私が把握している中での一例を、少しだけ御紹介ができるのではないかと思います。まず、先ほども少し話がありました寺西委員からの話だったと思うんですけれども、不自由な生活をさせる。これが私は必要なのではないかと考えています。近年の高校生、若者の現状というところでですね、非常に素直で優しいとか、小さいことがきちんとできるとか、そういった非常におとなしいタイプの高校生像というのが出てきておりますけれども、これをほかの見方から考えてみますと、すぐに、周りにありとあらゆる物があるんですね。それこそ、電器屋いつも、もちろんありますし、娯楽施設もある、食べ物も十分ある、そういったいろんなものがもう与えられている状況の中で育ってきた結果ではないかと、このように捉えることができるのではないかと、私は思っています。その反対のことを一度は経験をする。何もないところ、不自由な生活をする。例えば、広島なぎさ中学・高等学校さんの研修旅行の一つに、御存じの方おられると思いますけれども、マレーシアのサラワクという原住民とともに生活をするというものがございます。現地に行きまして、現地の人たちの高床式の住居と一緒に寝て、そして狩りをして、泥水の中でシャワーを浴びてというそういったことをやっている学校もございます。先ほど鶏の話が出てまいりましたけれども、この研修旅行では、現地の人たちが生徒たちを歓迎するために、豚を1頭、その日の朝殺すそうです。そういった経験もしているところもございます。

それから、少し違う話で、何かを最後までやり切ること、こういったことが必要なんではないかと思っています。先ほど申しましたように、何でもある時代ですので、何かこう、自分で徹底的に取りに行ったり、それからやり切ってその成果を得るということなどをしなくても、いろんなものが与えられているのが現状ではないかと思えます。そういった中で、高校生時代に何かやり切ることによって将来の自信につなげていく、こういったことが必要なのではないかと思えます。これも御存じの方おられると思いますけれども、広島修道高校では、浜田から広島まで1日かけて歩いて帰らせるそうです。浜田までは恐らくバスか何かで連れていくんだろうと思うんですけれども、当然、教員も車についていくんですけれども、決して手は出さない。当然、リタイヤする生徒もいる。でも、そのリタイヤする生徒は、次の年にまた挑戦する。そういったことで自信をつけていく。そういった取り組みをしている具体例もございます。

それから、社会とのかかわりというお話が三好委員から出たかと思えますけれども、これは、もうどちらの学校でもさまざまな形で取り組んでおられると思います。特に、地方に行けば行くほど、地域社会とのかかわりというのは、やっぱり外せないものではないかと、このように思っております。私どもの学校、広島文教女子大学附属高等学校におきましても、必ず地域社会とのかかわりの中で何かの課題解決をしていこうという取組を行っています。まだ、具体的に成果が出ているもの、はっきりと成果が出ているものはございませんけれども、地域社会と一緒に地域清掃をやりましたり、それから社会福祉協議会さんと一緒になってお年寄り、独居老人のところに訪問をしたり、そういったことは行っております。

それと、グローバル人材のことで少し思っていたことがありますので、この場をかりてお話をさせていただければと思いますけれども、川野先生や伊藤委員のほうから、学

校教育の中で、特に高等学校教育の中で、意識してグローバル人材って育てるものなのかというような趣旨のお話もございました。それを受けて、小村市長もそのようなことを少し言われてたと思うんですけども、私は、高校時代には、このグローバル人材になる素地をつくる必要があるのではないかと、このように思います。こういったことも、小村市長も少しおっしゃられたと思います。将来、どんな仕事をするにおいても、グローバルな視点というのは欠かせないと思います。何をするのでも、それこそ製造業でも、それから1次産業でも、ありとあらゆるところでグローバルというものから目をそらしてはできないという現状がございます。それは、意識してる、意識していないにかかわらず、そういったものに対応するために、グローバルに関する興味・関心を育成する。例えば、学校教育の中で、世界の動きをしっかりと伝えていく。異文化に対する理解を深めていく、そういった取り組みは十分できるのではないかと思います。そういったことで、高校時代にグローバル人材の素地をつくっていくことが大切であろうと思います。そして、もし、もう一歩先を望むのであれば、さまざま国の方々との交流をすればいいと思います。実際に、交流をしている学校もたくさんございます。定期的に交流している学校もある、これまた挙げれば切りがありませんけれども、例えば広島女学院高校・中学・高等学校さんでは、宗教教育を通して、さまざま形で国際交流を実践をされてますし、先ほど少しありましたが、平和の発信についても取り組んでおられます。そういった形で、身近なところから取り組めることをしているところはたくさんございます。

そして、最後に、身近なグローバル人材のことがございましたので、1つだけお話をさせていただきたいと思いますが、きのうのNHKの夕方ローカル番組、タイトル名忘れたんですけども、それで、広島修道大学さんにNHKのスタッフが全員行かれて、そこで番組をつくっておられました。そこで放送された中で、修道大学のインターナショナルハウスというのが横川にあるそうです。中国、それから韓国、アメリカ、その他のたくさんの国から20数人が共同生活をしている寮のようなところなんだそうですけれども、そこにレジデントアシスタントという修道大学の日本人の学生が2人住み込みでサポートをしているという番組でした。本当に身近にいるグローバル人材だと思って、それを拝見しておりました。実は、この2人の女子大学生なんですけれども、本当にたまにたまなんですけど、私の娘の高校生時代の同級生、2人とも同級生でございまして、私もよく存じ上げているんですけど、2人とも高校時代にニュージーランドへの留学を経験しておられました。そういった高校時代、その素地をつくって、そして、今現在、大学生としてグローバル人材といえるのではないかと思います。活躍をしているという具体例もございます。

少し長くなりましたが、以上でございます。

坂越会長： ありがとうございます。

では、古賀委員。よろしくをお願いします。

古賀委員： 私のほうは、3点、私なりに集約をさせていただいたことをお話ししたいと思います。

始めは、資料の確認も含めてですが。資料番号の5番は、これは、広島県教委のほうでおまとめになった、必要な資質・能力の例ですよね。間違いありませんよね。

事務局： はい。

古賀委員： そうですね。

私自身の個人的な見解を1つ言わせてもらおうと、おおよそのところは、私も全くこの枠組みに同感であります。ただ一方で、1つ非常に重要な要素が落ちているのではないのかなというふうに感ずることがあるので、1つ、それを指摘させていただきます。それは、前回の会議のときにも申し上げました。それは、いみじくも、今回の会議のときにも小村さんのおっしゃったことと通底するんですけども、広島らしきなんかないでしょって話ですよ。要するに、特異広島というのはなくていいという話と同じなんですけれども、私は、あのときに、前回、学習指導要領にすべてのことが記載されてますよ、今度の新学習指導要領、皆さん読みましょうというふうな趣旨の話をしましたよね。そこに大体のことは、ここで書かれている内容、ほぼ大体のことは書かれている。したがって、まず、先ほど率先垂範という言葉があったけれども、広島県が教育立県広島を目指すのであるならば、全国で一番の教育立県になることこそが、まさにグローバル人材の育成につながることはないんですか。つまり、そういう公教育で使命として示されてる、国が示している内容を一番に果たすことが、まず、まずは広島県がグローバル人材を養成していることを喧伝することになりませんかということでもあります。

そういう意味で、私なりにグローバル人材の定義ということを考えて、いろいろつらつら調べてみたら、文科省と経産省が産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会報告書というのをつくっておるんですね。その中で、彼らはこう言ってます。第1番目に、グローバル化というのは「主体的に物事を考え」となっている。2番目以下、私は6番目まで分類しましたがけれども、2番目以下は、ここに上がっているグローバル化に対応する資質・能力。これと全く一緒なんです。つまり、主体的に物事を考えが、この表の中に抜けておるんです。つまり、今般の学習指導要領が、一番、一番言っているのは何か。それは、生きる力でしょう。先ほどの言葉、生き抜く力ですよ。つまり、勝ち残る力ですよ。そういうアグレッシブな力。まさに、それは、広島県の県民性にも通底するところかもしれないし。だから、この生きる力、あるいは主体的に判断し、考え、そして行動する力、これをまずグローバル化の基盤にしてほしいと思いますね。それでなければ、あとは技術的なことに、やっぱり傾斜し過ぎてませんか。もちろん、この技術的なことは大事ではありますけれども、まず人間として生き抜く力。ここが、やっぱり、まずグローバル化の原点。もっと言ったら教育の原点だというふうに私は思います。これが1点。

それから、2点目として、附属の今校長をしますから、附属のその事例として、もし皆さん方にお示しをして、参考になるかならないかわかりませんが、やっていること、1、2お示ししますと、これが2点目ですが、幸いなことに、私のところはSSHという国の開発指定を受けています。9年やっています。ことしで10年目に入って、さらに5年続けてやることになりました。これの、9年間の総括をすると、諸外国の子どもたちと一緒に共同授業をやります。授業を受けるんですね。例えば、去年は、韓国の子たちと一緒に附属のキャンパスで物理の授業を受けました。物理の教員が、英語で物理の授業をします。同様に、韓国に行って、韓国の教室で、韓国の教員が英語で附属の子と韓国の学校の子と一緒に授業をします。一昨年はドイツに行きました。というふうですね、いわゆる実際にやっていること、英語科の教員ではなくて、他教科の教員も、やはりしっかりと第二外国語とは言いませんけれども、まあ実際は英語でしょうけれども、英語でやっぱり授業ができるような、そういう力量はやっぱり必要ではないのかと思います。ただ、これは、すべての高等学校の教員に、一朝一夕で求めても、なかなか難しいことでしょう。

そういう意味で、3点目の私の主張としては、これまで、今般、広島県は既にやってこられていることですが、やっぱり拠点校形成が要ると思います。つまり、選択と集中です。すべての高等学校を同じレベルで同じように力点を置いてやることは、恐らく不可能でしょう。そういう意味では、やはりどうしても打って出るグローバル化であるならば、拠点校形成すべきだと思います。そうではなくて、アベレージで、平均的で、皆に共通するようなそういう力点の置き方、もちろんそれもあっていいでしょう。つまり、拠点校は、すべてがある意味特殊であってはならないと思います。どの学校にも共通のもの、それは公教育に使う。しかしながら、そこでやっぱり特徴を持つような拠点校形成をやっぱりこれから果たして、グローバル化に積極的に対応すべきではないでしょうか。

これは、私の個人的意見であります。これが3点目の私のお話の内容であります。

以上です。

坂越会長： ありがとうございます。

3点目は、まあ、もう少し議論が煮詰まってから考えることにしましょうかね。

もうそろそろ予定の時間になってきたんですけれども、すみません、前先生。最後に何かコメントを。

前委員： 失礼します。最後、まとめというわけではないんですけども、今までの話を聞きながら、私の思ったことをお話しさせていただきたいと思います。

前回のこの会でも、私がお話したのは、1つは、「生徒のバランスの取れた知徳体」という言葉がありますけれども、知の中であっても、いろんなバランスがあるだろうと。それをやっぱり見つけていく。もう一つは、やはりいろんな環境の変化をこれから非常に激しくなったりしますけれども、そういう環境の変化に対してきちんと対応できる力をつけるんだという2つをですね、実は、前回、私がお話をしたつもりであります。

先ほど、普通科の存在意義というようなこともございましたけれども、私は、まさに、その辺が普通科の一つの存在意義ではないかということ、ずっとこう、私は思っています。先ほど、私は、グローバル化のときでも、必要ないからなかなかこう、その気に

生徒がならないんだということをお話しましたがけれども、裏を返せば、必要なときにそういう力を発揮できる生徒は育てておくべきだということをお話したわけでありまして。

あと、普通科から、なかなか特色が出にくい中で、やはりそういう転ばぬ先のつえではないけれども、基礎基本をきちんとつけて、次のステージのときにきちんと活躍できる人間を育てていくということは、大きな、私は使命だろうと思っています。反面、専門学科については、もっとその専門性を高めてですね、履修学科、いろんな課題ありますけれども、普通科については、やはりそういうバランス、あるいはその、さっき話したような環境の変化に絶える力、その辺はやはりある程度基本的な知識というか、常識というか、教養というか、そういうものがなければならぬだろうと思うんです。それを、やはり育成をしていきたいということをお話しているところであります。

その辺がきちんとできれば、多くの学校でいろんな取り組みやっていますけれども、おのずとリーダー性を育てていったり、あるいはそのグローバル化の芽が出たということはあるのではないかと考えています。ただ、どうしても、今、大量の退職が出たり、あるいは少子化、あるいは外国の方が増えている中で、どうしてもこれから社会に出る子どもについては、非常に今までにない力が非常につくれるということも事実だろうと思うので、それを何とかこう身につける、より高い専門性を身につける。そのための大きな基礎になるのは、私は普通科の教育だと、バランスのとれた教育というぐあいだと思っていますので、そういうことを取り組みながら、これからの広島県を担っていく素地が必要ということをお話、今日のお話を聞きながら、感じております。

以上でございます。

坂越会長： ありがとうございます。委員の皆さん、まだまだ御発言いただきたいところありますし、また御希望もあるだろうと思うんですけれども、すみません、時間になってしまいました。次回、もう一度、この人材、あるいはこの人材育成のための高校教育のあり方ということについての話、話し合いを持つスケジュールになってますので、もう一度またお願いしたいと思います。

今日のところ、司会のほうにまとめるといっても、なかなか難しいんですけども、やっぱり基本へ立ち返るといいますか、グローバルにしてもリーダーシップにしても、やっぱり教育の根本というか、やっぱり自分という、子どもたちが自分という人間をいかにつくる自己形成、自立、自己確立。そして、自分を確立するために、自分たちでできるわけなくて、他者との関わりですよね。異文化との関わりだったり、友達だった、教員だったりという関わりの中で自分がつくられていくんだという、本当に教育のベーシックなところに戻っていったかのような感じも持ちました。またこれを、現代社会のニーズにどうやって適応させていくかというのが次の課題になるんだろうというふうに思います。

事務局のほうへのお願いです。

たくさんいただいた意見、キーワードも大事なキーワードたくさん出てきました。このまとめのほうを、事務局にお願いしたいんですけども、今日、資料1で出してくださったような形で、概要を、エッセンスを抜いていただければというふうに思います。

以上、今日はこれで、広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会第2回を終了しようと思いますが、少しだけ。事務局のほうともちょっと事前相談をしまして、私たちの協議を続けていくプロセスで、ぜひその県民、あるいは場合によっては高校生の意見もぜひ聞きたいと思うんですけれどもね。今まで、1回、2回いただいた意見を踏まえながら、アンケートになるか、あるいはちょっと抽出のインタビューになるか、その辺の、具体は少し検討させてもらいたいと思うんですが、そういう調査、意見聴取をまず少し仕掛けてみたいというふうに考えています。その中身につきましては、事務局のほうで素案、試案つくってもらいまして、ここで委員の皆様にもまたお知恵をいただいて、集約したい。最終的に、会長のほうで、それじゃこれでいこうということで、事務局のほうでやってもらおうと思うんですけども、また、その際にはぜひ御協力、御助言をよろしくお願ひしたいと思います。

それでは、事務局のほうにお返しします。

事務局： はい。長時間にわたりまして、熱心な御協議をいただきありがとうございます。

事務連絡でございますけれども、次回、第3回の協議会の日程でございますが、7月23日、月曜日を予定しており、午後2時からとさせていただきますと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

もう1件、すみません。最後に事務連絡というのが、A4の紙で右肩についていると

思いますけれども，御覧いただけますでしょうか。

これは第1回協議会におきまして，会長より御提案いただきました本協議会の議論をより充実させるために参考となる資料を，委員の皆様からも御提供いただくということにつきまして，その手続を整理いたしました。簡単に説明いたします。

1でございますが，様式と書いてあります。ファイリングの都合もありますので，A4判でお願いをいたします。

2のスケジュールですが，次回会議の1週間前までをお願いいたします。あらかじめ委員の皆様を送付したいと思っております。

次に，3ですけれども，いただいた資料は公開しますので，それを前提に御提出をしてください。

最後，その他ですが，終了した会議のテーマにつきましても，追加すべきものがあれば御提出いただきたいと思います。

以上でございます。本日はどうもありがとうございました。

(16 : 00)